ISSN 1883-3179

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第16号　2023年11月1日

目　次

巻頭言

忘却の時を促しつつ、忘却に抗うためのアーカイブズ ・・・・・・・・・・・・・・ 奥田　太郎・・・・2

回想の中の南山

もう一つの南山短期大学中庭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 丹羽　牧代・・・・4

南山国際は「奇跡」の学校だったのか ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 野田　　悟・・・・7

南山発見

南山女子部　学校制服リニューアルのいきさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 濵口　吉宏・・・・10

聖霊の理科室 ・・・市原　由美子・・・・12

南山小の子どもたちのオリジナルソング

　　～コロナ禍を乗り越えて～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 河田　愛子・・・・14

卒業記念ペンダント

左：聖霊高等学校、右：名古屋聖霊短期大学（南山アーカイブズ所蔵）

巻頭言

忘却の時を促しつつ、忘却に抗うためのアーカイブズ

奥田　太郎

日々のおしゃべりから公文書までがすべてデータという名の資料として電子的にウェブ上に保存される時代にあって、その資料を利活用する技術も日々飛躍的に発展している。たとえば、今年に入って大きく世界を騒がせたいわゆる「生成系 AI」もその一つと言ってよい。しかしながら、人間の活動のあり方を大きく変えるこうした新技術も、結局のところ、（電力はもちろん）元となる資料の保存がなければ、たちまちに立ち行かなくなる。煌びやかな新技術にばかり目を奪われ、効率化やゼロコストといった「コンサル」ワードに心を奪われ、その足元を疎かにしていると、やがてその根を腐らせることになるのは明らかだ。しっかりとした足腰をもって新技術に向き合えるよう、歴史のなかで形を変えて繰り返し発せられてきたこの種の警鐘に改めて耳を傾けてみよう。今回は、電子データの大海を泳ぐことが日常化した世界に生きる私たちにとって、資料を保存することにどのような意味があるのか、考えてみたい。鍵となるのは、忘却である。（なお、本稿は、奥田太郎「残すこと、捨てること、残ること―資料の保存をめぐる応用倫理学的断想」『アルケイア―記録・情報・歴史―』第15号、2020年での議論に依拠している。）

「ビッグデータ」という言葉がビジネス界で飛び交い始めた2010年代前後から、「忘れられる権利」をめぐって様々な議論が交わされてきている。欧米圏を中心に、「忘れられる権利」をめぐっての訴訟の矛先は、強力な検索エンジンを提供する Google 社に向けられた。一連の訴訟の顛末とその詳細については、メグ・レタ・ジョーンズ『Ctrl+Z：忘れられる権利』（石井夏生利監訳、勁草書房、2021年）などの専門書で確認していただくとして、本稿では、そこで何が問題になったのかに着目してみよう。Google 社に矛先が向いたことからもわかるように、「忘れられる権利」をめぐって求められていたのは、元の情報そのものの消去ではなくて、情報を探されないこと、すなわち、検索結果情報の削除だった。もう少し説明すれば、もはや自分の情報がすべてネット上から消去されることは原理的に不可能であるにせよ、自分の氏名の入力により、情報の大海に沈む様々な過去の情報が瞬時に紐づけられ可視化され拡散されることがないように、という要請なのである。

実は、こうした要請が「知られない権利」としてではなく「忘れられる権利」として掲げられているところに絶妙な機微がある。簡単に対比するなら、「知られない」ためには、突き詰めると、元の情報をすべて消去してその可能性を根絶するところに行き着くわけだが、「忘れられる」ためには、そこまでしなくてもよい。忘れられた状態とは、元の情報が存在しているにせよいないにせよ、そこにアクセスされないことで発生する状態のことだからだ。誰しも、現在までに様々な情報や資料に触れてきた経験をもち、そうした情報や資料は今もなおどこかに存在しているはずだが、多くのものについてアクセスどころか思い浮かべることすらないだろう。私たちは、それらの存在そのものすら忘れているのである。このように忘却に焦点を合わせた要請の背景には、いろいろあったことは消えないとしても、むやみやたらに蒸し返されてしまうことはやめてほしい、という真っ当な感覚がある。過去にいろいろとやらかしたことが事実であり、記録として残されること自体に妥当な理由があるとしても、すでに償いが十分に行われた後もなお、あちらこちらでその事実が掘り起こされ衆目に晒され続けることは、人々から再起の機会を剥奪することになる。再起の機会を剥奪された社会で暮らしたい人など、どれくらいいるのだろうか。

ともあれ、「忘れられる権利」によって求められる「探されない」という状態は、「むやみやたらに探されない」こと、「むやみに拡散されない」ことを指す。裏を返せば、「忘れられる権利」は、情報や資料に対する適切な

仕方でのアクセスを拒否するものではない。それどころか、「忘れられる権利」が保障されるためには、適切な仕方での資料の保存体制の整備こそが要請される、と言ってもよいかもしれない。情報や資料が適切に管理されているのなら、むやみやたらに探されることも、むやみに拡散されることもないからだ。そうであれば、情報や資料を保存・保管するアーカイブズの存在意義は、「忘れられる権利」の保障という点にも見出せるだろう。

もう少し、思考を先に進めてみよう。ある人が「忘れられる権利」を保障されることは、その帰結の中に、誰かがその人のことを忘れることが含まれる。とはいえ、突然、忘れろと言われても、私たちは現在覚えていることを瞬時に忘れることはできない。できるのは、忘れたふりをすることぐらいだ。断固たる決意をもって忘れようとすればするほど、忘れたいことは頭の中に残り続けることだろう。しかしながら、それとは反対に、覚えておきたいこと、覚えておくべきことを不覚にも忘れてしまうことは誰にでもよくある。忘却というものは、いわば、常に私たちの主体的な意識をすり抜けて、どこかその外側からやってくるものである。そして、自分のことも他人のことも、選択的にではなく、ほどよく自然に忘れてしまうからこそ、私たちは次のステップに進めるところがある。人が生きていくうえで、制御できない自然な忘却は不可欠だと言ってもいい。とはいえ、そうは言いながらも、忘却はコントロールできないが、忘却の環境や条件を整えて忘却に備えることは私たちにもできる。まさに、「忘れられる権利」が求めているのは、そうした環境や条件を整えることに他ならない。そうした条件整備にアーカイブズが深く関わっているのだとすれば、電子データの大海の中で「むやみやたら」を競わされているかのような時代だからこそ、忘却の時を促す役割が、情報や資料を適切に管理するアーカイブズに求められているとも言えるだろう。

他方で、アーカイブズは、情報や資料を適切に管理することで、忘却に抗う役割も果たしている。私たちは、自分のことも他人のことも、忘れたいことも忘れたくないことも、自然と忘れてしまう。誰かから誰かへと口伝で語り継がれることがあったとしても、そこに残っているのは、語られる物語の中の登場人物のみであり、実のところ、元になった人のことは忘れられている。一度忘れられたものを適切な形で再現前させるには、口伝も含む遺された情報や資料をもとに、欠けた部分を明確化しながら、時間をかけて、知恵を絞って、複数人で協力して、その姿を手繰り寄せる他はない。こうしたある種の知的慎ましさに支えられて初めて、私たちは忘却に抗うことができる。忘却への抵抗を成り立たせている鍵が、資料を介した過去と現在との時間的振幅と、資料に接する複数の人間の間の関わりにあると考えれば、すべての「データ」を「現在」の観点から「むやみやたらに」寄せ集める昨今の情報環境が、真っ当な忘却への抵抗の地盤を掘り崩し、他方で、「忘れられる権利」を侵害するものであることもよくわかる。こうして考え直してみると、忘れてもらえないことへの抗いと、忘れてしまうことへの抗いは、アーカイブズの営為においてこそ両立するということが見えてくる。アーカイブズは、私たちが生きていくうえで、地味だが実に重要な役割を果たしているのだ。

さて、自身の足下へと目を向ければ、南山大学は、創立75周年を経て、2046年の創立100周年へと動き出している。また、来年2024年は、山里町へのキャンパス移転から60年、つまり、レーモンド建築によって構成されている現在のキャンパスが還暦を迎える。これほど時間が経過した今となっては、当然ながら、南山大学が創立以来培ってきた様々な価値あるものについて、多くの人たちが忘れてしまっていることもあるだろう。あるいは、「むやみやたらに」掘り起こしてほしくないこともあるのかもしれない。いずれにせよ、南山大学100年の歴史を紡ぐ鍵は、南山アーカイブズが握っている。

忘却の時を促しつつ、忘却に抗う。そうした基盤を醸成していくことが、現在ここにいて史資料を日々生み出している私たちに課せられた責務だと言えよう。

みなさん、使わなくなった資料は、アーカイブズへ届けましょう。

（南山大学社会倫理研究所・教授）

南山アーカイブズ（ライネルス館）

回想の中の南山

もう一つの南山短期大学中庭

丹羽　牧代

南山短期大学と南山大学短期大学部、そして外国語教育センターへと、南山では計29年の歳月を過ごした。それだけあれば語る物語は山ほどある。しかしアーカイブズニュースの性格を少し考えてみて、「あまり目立たない、それほど華々しいわけではないが南山短大を支えていたもの」のある面を記録しておくのもひとつの価値であると思い至った。従ってここに記すのは多面的「ナンタン」のほんの一部である。かつ筆者は英語科の教員であったので、あくまでも英語科の姿が中心となる。

南山短期大学いりなかキャンパスには通称中庭と呼ばれる場所があった。いりなか駅から坂を上ってキャンパス入り口の階段を上がれば真正面にある開放的な明るいスポットである。四方の建物からの視線に囲まれて、まさしく「舞台」のような役割を果たしていた。落羽松（ラクウショウ）というシンボル的な樹木の元で、実践的な英語力を誇り発信する学生たちや、時には破天荒と言えるようなプロジェクトを（教員をハラハラさせつつも）やりきってしまう学生たちの場だったからである。多くの活発な学生による正課内外の活動が行われ、そこでは元気で外向きな「ナンタン生」のエネルギーに満ちた声が常時空間を満たしていた。いつも賑やかで明るく、前向きで外向的で光輝く中心地であり、「ナンタンはこんな場所」のイメージを体現するような場所であったという記憶が、多くの元教職員や卒業生には刻まれている。誤解を恐れず言えば、何をおいてでも、創造的であること・学びの成果を自分の外部に向けてプレゼンテーションするため果敢であること、が前面に出ており、それが学びの大きな方向性であった。そして中庭は、象徴的な意味合いでのその表舞台だったのである。

さて、しかし話はここからが本題である。

もちろん筆者にとっては、そのように才能やエネルギーに溢れる積極的で優秀な学生と共に様々な正課内外の学びをすることは歓びであった。そのような優秀な教え

図１　メインの中庭

写真１　正門を抜けて階段をあがった中庭を臨む

子たちの中には国や文化の壁を越えて起業した人、研究者になった人、海外に長く拠点を置いて仕事している人など、分かり易く華やかな人生を送る人たちも少なくはなく、その活躍の報告を聴く度にさもありなんと誇らしく感じたことも何度もある。しかし、それはそれとして、長い教育職員としての生活の中で残り、今でも南山短大の中核として残っているものは、実はもう少し地味な教育研究活動であり、その中でそれぞれに心砕き奮闘する（そしてうまく行かず足掻く）学生たちの姿である。そ

れを象徴する場所が、いわば裏舞台とも言える「もうひとつの中庭」なのだった。

もうひとつの小さな中庭は、多くの人にとっては中庭であるという認識すらなかったかもしれない。四方を建物に囲まれパティオの形態をしており、小さいながら植栽の植えられた一角もあり、間違いなく中庭である。だが、たいていの人にとっては、そこは地味な「通路」なのだった。中心地であるメインの中庭は、通り道でもある以上に、出会いの場でもあり、華々しい行事や活動発表の場でもあり、光り輝いて見える場であったのとは対照的である。

筆者は、この中庭を見下ろす二階に研究室を持っていた。研究室で過ごす時間の長い大学教員にとっては、窓からの眺めは気分転換にもってこいのものである。また自分自身もそのひっそりとしたもうひとつの中庭の佇まいが大層気に入っていたので、しばしば窓の下の様子を観察しつつ一息入れていたものだった。そういうわけで、

図２　繋がっていて管理棟でもあり図書館棟でもあった部分の二階見取り図。真ん中の空間が「もうひとつの中庭」になっている。左隅の階段を降りると一階図書館へ至る。

写真２　図書館側から見下ろす（図２青⇒方向）「もうひとつの中庭」。筆者の研究室は右側の二階。

この「もうひとつの中庭」の観察者として長い時間を過ごしたのである。ではここにはどんな学生が行き来していたか。基本的には、この中庭を横切って通る学生のほとんどは一階図書館へ入っていった。（図書館へのアクセスルートは図２の二階から左端の内階段を下るルートもあったのだが、一階からもうひとつの中庭通路を通って外から行く学生の方が多かった。）頻繁に見かけた図書館通いをする学生たちは、どんなポジションにいたのか。

大量の本、雑誌、辞書その他の資料はその圧倒的な文字情報の蓄積をもって「未知の領域がこんなにもあるのだ」という無言のメッセージを送り迫ってくる。そこへ通いつめて落ち着いて過ごすためには、その圧力に対してまったく鈍感であるか、もしくはそのメッセージを受け止めて対峙する気概を持ち、そのことをむしろ楽しむことができる心性を持つかのどちらかという気がする。平たく言えば「本が好き。文字が好き。知らないことの扉を開けるのが好き。文字情報をコツコツと忍耐深く解読し咀嚼する努力が苦にならない。少なくともそれを頑張れる。」という学生たちであろう。そうした学生たちは、本当によくこの小さい中庭を通って図書館に出入りしていたのである。そして、どちらかと言えば大きな中庭での活動は苦手であるタイプが多かった。そんなわけで、わかりやすく目立つわけでもなく、わかりやすく成果を上げてトロフィーを持ち帰るなどの功績があったわけでもない。でも、こうした学生を毎年ずっと観察者として追っていた筆者は、それぞれの学生の達成した小さな学びの成果を知っている。英語の読本を読みつくす勢いで借りまくって四苦八苦しながらも内容をまとめて報告していた学生。授業で紹介したり指定したりした、彼女たちにはややハードルが高いかと思われる専門書を何回も借りて読んでいた学生。その昔、図書館の本に添付されていた貸し出しカードによって、どれくらい借りられているのかが一目で誰でも確認できる時代があった。背表紙裏のカードの記録を見て、こんな歯ごたえのある専門書によくも食らいついたものだ、と感心したことも一度や二度ではない。そういった学生たちの努力は、華々しくはなくても、衆目を集めるものではなくても、授業内報告や英文演習（ゼミナールに近い授業）での英語小論文のような形で確かに結実していたのである。問題意識を持ち、調べ、検証し、考察するという、研究の基礎の

そのまた入り口に立つような拙いものではあった。しかし学生たちの地味だが懸命な努力・英語という言語との格闘は、筆者にとっては最大限に後押ししたい、大学ならではの学びであったのである。

「あ、また図書館に向かっていったな。」と窓の外に目をやるとき、通った本人には届いていなくても筆者は密かにエールを送っていた。自己表現に長けており華やかな表舞台で活動すること「だけ」に価値があるわけではないよ、あなたのその地道な努力は少なくとも必ず自分自身の土台を作る、と。そしてそんな堅実で地道な積み上げを担うことに長けた人は、実は今もこの先も、コミュニティになくてはならない中核のひとりなんだよ、と。

南山短大を思い起すとき、これら大部分の「特に突出しているわけではないが堅実な大勢」なくしてその伝統は保持されていかなかったのではないか、とあらためて思う。もちろん、華やかな英語活動の担い手、地味で堅実な英語力の担い手、そんな類型化が簡単にできるわけもなく、このような二分に当てはまらない学生も多々いた。そもそも言語の習熟に際してこのような切り分けを想定すべきでもなかろう。ただ、敢えて記しておきたい。英語発信力を武器として華々しく活動し綺羅星のような成果を見せていたのも南山短大英語科のひとつの姿である。しかし、同時に、目立ちはしなかったが、地味にしかし確実に読み解く力を蓄えていったかなりの数の学生たちが、実は中核にいたこともまたひとつの姿である。「ナンタン」にて、未完であり成長途上であったそのような学生たちと交差する時間を持ったことは、筆者の財産の一部であると、心から感謝している。

（南山大学名誉教授）

史資料提供のお願い

南山アーカイブズでは、以下の欠号になっている史資料を探しています。
ご寄贈いただける場合は、南山アーカイブズまでお持ちいただくか、郵送・学園便等でお送りください。

- 『南山大学卒業アルバム』（1980年、2008年）
- 『NANZAN HIGH SCHOOL BULLETIN』（No. 131、No. 132、No. 133、No. 134）
- 『南山短期大学ブレティン』（49号　2004.10.10）

また、南山学園に関する以下のもので、南山アーカイブズへご提供いただけるものがありましたら、ご連絡いただきたくお願い申し上げます。

- モノ史料：鞄・校章・バッジ・体操服・制服など
- 写真：授業風景・学生生活・サークル活動など（撮影年月日が分かるもの）

史資料の取り扱いについては、個人情報が含まれている史資料は非公開にするなど、十分注意しております。
寄贈者による公開制限希望にも対応いたしますので、お申し出ください。

〈連絡先〉
学校法人南山学園 南山アーカイブズ
TEL: 052-861-0613/FAX: 052-861-0614
E-mail: nanzan-archives@nanzan.ac.jp

南山国際は「奇跡」の学校だったのか

野田　悟

☆愛知私教連による編年の生徒・父母アンケート結果から見る南国の特質

《生徒》「この学校に入って良かった」（県内私学40数校における南国の順位（位）と回答率（%））

年度	2006	07	08	09	10	11	12	13	14
順位	2	2	1	1	2	2	2	2	2
回答率	76	83	87	88	88	88	85	85	84
年度	2015	16	17	18	19	20	21	22	
順位	3	1	1	1	1	2	1		
回答率	83	92	89	87	90	89	98		

《父母》「この学校に入れて良かった」（同上）

年度	2006	07	08	09	10	11	12	13	14
順位	4	9	3	11	6	2	7	12	9
回答率	90	85	91	87	88	84	89	87	88
年度	2015	16	17	18	19	20	21	22	
順位	4	8	7	2	6	6	1		
回答率	91	88	89	92	90	95	96		

「良かった」は様々な理由に基づく総体としての受け止めにすぎないし、他校と比べることに過大な意味を求めることも正しくありません。逆に、困難な条件の下でも「良かった」の向上を目標に努力して実績を上げてきた学校には、それなりの意味合いを持つ数値と言えます。それでも、この結果が開校当時から高位置を占めていることは特筆すべきことと言えます。以前から、①生徒の満足度は高く、②文化祭など生徒の自主的な活動への支持もあり、③授業や教員に対する信頼も高いが、④妨害生徒にはもう少し厳しくしてほしいと考えている生徒が一定程度いる、という基本傾向がありました。①②については不変で、閉校へ向かう時期も、大きく変わりませんでした。③については、幸いにも「授業がわかりやすい」「指導が熱心」の評価を維持してきました。しかし、多くの教員がこれに慢心することなく、「わかりやすい」に加え「より深い」授業の構築を目指して研鑽・実践交流を積み重ねてきたであろうと思います。

また、④については、「もっと厳しく」という以前から概ね不変であった要望がある時期から減少し、19年にはついに少ない方で堂々の第１位となりました。なお、生活指導については、「厳しすぎる」が少ない方の第１位かつそのように思う生徒がゼロ。特筆すべき本校の特色と言えます。また、現在の社会や政治について「不満なので変わってほしい」と思う生徒はやや減る傾向はあるものの40％以上を占め、「自分には関係ない」と答えた生徒の割合が多くない点は、生徒の社会認識のスタンスを示す事柄として一定の積極的評価ができ、主権者教育の上で頭の片隅に留めておくべき事柄だと考えてきました。

2014年５月新歓フェス

★県内の高校生と繋がって活躍したたくさんの生徒たちがいた

ビッグフェス等に多くの南国生が集いました。例えば2008年には、本校からはダンスチームや料理部、バレー部有志の模擬店、１万人パレードへの「主体的参加」のほか、来場者と合わせて総計100名以上の生徒が参加しています。これは、その後の閉校に向かう時期の状況からすれば信じがたい数と言えます。以下は、当時中央実行委員を務めていた生徒の感想記事です。

「どの企画もすごく良かった！　どの企画もすごく輝いていた！　この半年間を思い出すと涙がとまらないって感じです。組織組織組織って大変だったよね。でも楽しかったね！　群舞めっちゃ鳥肌たった！　1万人パレード、走りまくって叫びまくって凄かった！全部本当に本当に楽しかった！　わたし達がもってる全ての力が爆発したビッグは最高でした！……」

（「組合ニュース」2008年度版より抜粋）

生徒の「自主的な活動」は校内ではずっと活発に担われてきましたが、それで完結せずに県内私学の中でも大きな役割を果たし、質的にまた違う学びを得ることができた時期でもありました。振り返れば、それを支えた先生方の奮闘も大きかったと思います。

さらに、以下はサマーセミナーに参加した生徒の感想文例です。こちらも社会とつながる生きた学びの機会を生かした貴重な体験の一コマとして、取り上げてみました。

戦争を実際に体験した森田先生の平和主義に基づいた見解は、戦争を体験したことのない私たちにとって新鮮なものでした。日本の国際社会における役割が変化していくにつれて、集団的自衛権を容認すべきか否か、これからの日本がどうあるべきか。国民一人ひとりが真剣に考え、取り組まなければならない喫緊の課題だと思います。……私たちのような世代こそ、これからの日本について考え、意見を交わすべきではないでしょうか……。

（'19年度「日本の政治を切る」：森田実氏（政治評論家）の講座に参加した南国・高１生徒）

◇南国の特長はどこにあったのか改めて考えてみる

南国を「奇跡の学校」と呼ぶ人がいます。実際には当然ながら課題も多くあり、自画自賛傾向でないかを問うてみる必要があるのですが、「偶然」も含め確かに奇跡ではないかと今更ながらに感じる点もあります。勝手な思いながら、その一端を拾ってみました。

まず１つ目は、世界各地域からの帰国生で構成されていたと言う成り立ちによるもの。海外での貴重な体験や＊言語習得の一方で、周囲からの疎外感や苦悩も経験している子が多い。それは、共感的理解や弱者への配慮ができる土台となり易かった。勿論ざっくりと言えば、です。

＊〈参考〉英検１級・準１級表彰者（愛知県私学協会による）数の推移～中学生・既卒者を除く～

	学校	2010年	2020年
１級	南山国際高校	17①	7①
	H高校	0	3②
	T高校	0	2③
	全県合計	17	19

	学校	2010年	2020年
準１級	南山国際高校	45①	30②
	S高校	20②	31①
	H高校	7③	24③
	全県合計	92	272

○数字は愛知県内私立校の順位

2022年３月卒業式

一方で、言語習得については、諸刃の剣とも言える面もあります。つまり「英語力のある者が国際人」などという狭い自己憧憬に陥らず、言語をツールとして会得し、基盤としての自国文化と多様な他民族文化を理解することが、本校の教育に求められてきた課題の１つであると認識する必要もあり、そんな意識に基づく教育実践も少なくなかったと思います。

〈参考〉高３小論文授業より：テーマ「言語植民地主義論」

小学校への英語教育導入など、島国であるこの日本にも目に見える形で「グローバル化」の波が押し寄せているかに見える。しかし、ここで取り違えてはいけないのは、英語が話せることがそのまま国際人につながる訳ではないという点だ。現在我が国の書店には海

外のスターのことを載せた雑誌が溢れ、若者の興味を盛んに煽る欧米のファッションやニュースをよく目にする。その上過剰な語学教室の宣伝広告を見ていると、まるで英語を話すことが１つのステイタスであり、果てには欧米人への憧れまたはやっかみを植えつけている気がしてならない。英語というのは、世界の多数の人とコミュニケーションをとることを可能とする、ほんの伝達媒体に過ぎない。大切なのは、一言語であるその英語を駆使して自らの意思を伝えることだ。内実の伴わない英語は何の意味も持たない。常識も知識も持たない人間が英語を話せたところで、他国の人とコミュニケーションをとることなど不可能なのは明白である。このことを忘れて、非英語国民である自らの国の文化や歴史、また誇りを後回しにしてがむしゃらに英語にこだわろうとするような人々の意識そのものが、「言語植民地主義」におかされているのではないだろうか。英語を学ぶことは、この世界に生きる多様な人々とコミュニケーションをとる可能性を広げることだ。しかし、忘れてはならないのは、英語を話すことが出来れば魔法のように異文化と接することが出来るわけではない、ということだ。外国へ行った際、天皇制や政治形態について質問され、答に詰まる日本人が多いという。これは、もはやその人の知的レベルの問題である。まずは、日本の若者に、英語を話すことが出来ることはファッショナブルであるという錯覚を与えるような宣伝はやめ、今一度自国に対する誇りを見つめ直してほしいと思うのだ。

（2012年度高３生徒の作品）

２つ目は、開校当時からの「自由な校風」。制服はなく（標準服はあり）、細かな生活上の規制が少なかった点。常識的なこと以外での「不思議な禁止」は、ガムの持込みくらい。服装・髪型に関する規制が一切ないことは、成立の背景として指導の煩雑さ回避という一面があったにせよ、結果として自律への大きな後押しとなったことは間違いないと思っています。

３つ目は、生徒の「自主的な活動」を尊重したこと。文化祭・体育祭をはじめ生徒会行事は、アカデミックさには欠けるものの、主観的に満足度が高いことは先に述べました。

４つ目に、管理のない自由な教育実践の保障と開校当時よりの週休２日制、休日の部活が原則なかったことも大きいでしょう。馬場、勝野先生をはじめ「宝」と呼べるような人材による豊かな実践の足跡に留まらず、教育実践への不介入は良くも悪くも幾多の斬新な実践を可能にしました。そして「ゆとり」の先取りは、総体として「のびのび」を方向づけたと思います。

もう１つ、職員室が「呼びつける」場所ではなく、教員との語りの場・くつろぎの場、居場所のない生徒の居場所として認知されてきたことも「奇跡的」でした。それが幾重にも豊かな関係づくりに寄与したことは、多くの生徒・教員が認めるところです。

2023年２月スポーツ大会

こうして見てくると「意図されたもの」は決して多いわけでなく、ほとんどが「結果としての奇跡」であったのかも知れません。しかし、行政が豊かな教育のための条件整備を怠り、国家的理念の下で管理を強める傾向を見せる時代こそ、このような教育はそれに対峙するモデルになり得るという思いを私は抱いています。すでに「鬼籍」に入った本校ですが、そんな含蓄のある南山国際の教育の「軌跡」を、微々たるものとは言え残してきたのではないでしょうか。

（南山国際高等学校・中学校元教諭）

南山発見

南山女子部　学校制服リニューアルのいきさつ

濵口　吉宏

南山女子部は創設75周年を迎えましたが、１期生の卒業アルバムを見ると、そこにはすでに制服を着た少女たちが写っています。しかし、写真をよく見るとジャンパースカートの首周りの形状や大きさがまちまちです。理由は、昔は学校から型紙と大まかな仕様書をもらい、各ご家庭で、あるいは仕立屋さんに持ち込んで作ってもらっていたからです（昔の卒業生談）。いわゆる4M（かつての名古屋の百貨店の４店）も製造・販売に携わるようになったとか。

私は、生活指導部長の任にあった時に、この女子部制服のリニューアルに携わったことから、そのことを記録に留めておこうと思い、その経緯について書かせていただきます。その前に一つ余談になるかもしれませんが、男子部は1995年10月から制服が自由化になりましたが、実は女子部でも同時期に生徒会執行部を中心に「制服自由化」運動が盛んでした。その議論に決着をつけようと、1996年11月20日に生徒総会が開かれ、賛成・反対双方の立場から演説が行われ、全校投票の結果、賛成36.8%反対61.4%（資料参照）で否決され、制服が存続することになったエピソードも記しておきます。

さて、本題に入りますが、生活指導部が中心となって、2010年夏頃より学校制服の改定についての検討を始め、同秋の職員会議にて改定する決定がなされました。その後、大手学生服メーカー３社によるコンペを行い、某メーカーに決定。複数回にわたってサンプル（制服見本）を製作しつつ細部にわたる詰めの作業を行いました。その間、生徒会を通して在校生に意見聴取を行ったり、教員アンケートも実施しました。そして、2011年６月30日の職員会議にて新制服の仕様と2012年度入学生からの導入が最終決定されました。以下は、改定の趣旨および改定のポイント（当時の会議資料より）をまとめたものです。

１．改定の趣旨

１）品質の均一化を図ること

現行の制服は販売店それぞれに製造・販売を依頼してきた。各社縫製であるがゆえに、仕様に若干の違いがあり、厳密に言えば異なった制服が混在している状態である。色合いも多少異なっているために、育友会のリサイクルで購入した上着のジャケットとジャンパースカートが、販売店が異なっていたために色合いが違っているといった声も伺っていた。仕様を統一するにしても、何らかの改善・改良を試みるにしても特定の販売店と交渉することが難しく、機能面について検討することがなかなかできずにいた。今般、メーカーによる一括縫製に切り替えることにより、品質の均一化が図られ、製品の機能面での改良を随時行っていくことが可能になる。

２）機能性（着心地や手入れの簡便さ）アップを図ること

上着の着心地（肩まわりの改善）、ジャンパースカートの着脱方法の見直し、夏服の暑さ対策や洗濯のし易さ、撥水・防臭・UV カット加工などの機能面について検討し、現時点でよりよいものを制服の仕様として採用すべく準備を進める。ジャンパースカートスタイルの形状やベルトなどの基本的なデザインは継承しつつも、デザインや仕様について若干の変更が出てくる可能性はある。

３）着崩し防止を図ること

昨今、学校制服のスカート丈を短くする生徒が増えており、さまざまな対策・対応を講じている学校は少なくない。本校とて例外ではない。販売店で制服を購入される際に最初から規定の長さよりも短くするよう要望される保護者の方もおられるということを伺っている。学校制服は私服ではないので、学校制服の本来あるべき姿が保たれるよう、制服メーカーとしても対策を講じている。本校としても検討項目の一つに加えたい。

２．改定のポイント（新制服の仕様について）

１）生地素材の変更

最終的に選んだ生地素材の関係で、紺の色合いが現行の制服よりはやや濃い紺色となる。また、上着やジャンパースカートには撥水加工が施されている。夏服はウォッシャブルになっている。

２）イートンジャケット（上着）のデザイン変更

大きく変わったのはポケットスタイル。従来の貼り付けポケットを、胸は箱ポケット、脇はフラップポケットに変更した。見た目にはわからない細部へのこだわりとして、メーカー提案の⑴「サスペンションブリッジ工法」で服の重みを肩全体に分散させて、軽く・着やすく・型崩れしにくい服を実現。⑵「前肩服」で授業中の姿勢、自転車に乗った姿勢、前かがみになった時にも快適で動きやすい仕様になっている。肩線が前にきており、自分の肩を自然に前に押し出すような肩フォルムになっている。そのため、服が身体に自然に沿い、動きも快適。⑶アジャストカフス（成長に合わせて袖口を３㎝伸ばすことが可能）。⑷校名入りのデザインボタンの採用（「NANZAN GIRLS’ SINCE 1948」）。上着の内側には、校章や「HOMINIS DIGNITATI」の織りネームも入っている。

３）ジャンパースカートの仕様を一部変更

現行の制服の着脱方法は、左脇ファスナー＋左肩スナップで肩部分が分離できるようになっているが、新制服は、首周りの開口部分をやや大きめにとり、脇ファスナーのみの仕様に仕上げた。理由は、カバンが自由であるため、現状を見るとリュックやスポーツ用エナメルバッグ、持ち手の部分が長い横長のスクールバッグなどの肩かけカバンが主流となっており、登下校時の左肩の圧迫感（スナップがあることによる痛み・違和感）をなくすためである。肩かけカバンを使用している生徒の大半が右肩にかけている。もう一点は、左裾部分に淡い紺で「Nanzan」の刺繍ロゴを入れた。デザインの一つというのが表向きの理由だが、スカート丈を短くカットすることを抑止する効果を狙ったものでもある。

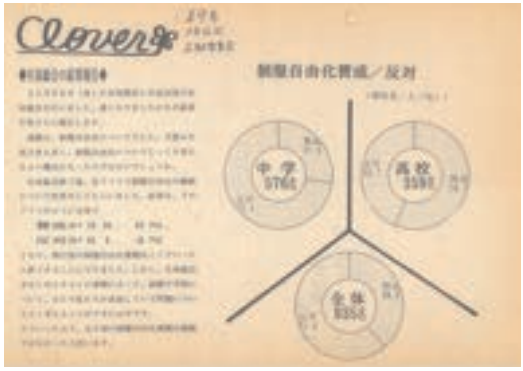
４）ブラウスの襟元にあった襟章（学年バッジ）を廃止

在校生や卒業生の襟章への愛着は当然であるが、一方で、洗濯時の着脱への不満の声も少なくなかった。襟章を付けていない生徒が挙げる理由の大半がそれである。襟元の重みをなくし襟元のよれよれ感（乱れ）も軽減。また、校外では学年が特定できない方が危険防止につながる一面もあり、中学生か高校生かの、しかも学年が特定される現行の学年バッジ（襟章）の弊害（負の面）についても考えるべきである。現行のジャンパースカートとベルトという「南山女子部らしさ」は踏襲される。学年バッジ（襟章）は一定の役割を終えたのではないだろうか。UV カット効果の生地素材を採用したため、色合いが純白ではなくなり、やや黄がかった白となる。

５）セーター（自由購入品）を変更

「寒い時暖かく、暑い時涼しい」が特徴。つまり、暑い寒いを「ちょうどいい」にする素材。現行の形状に似た上着の下（ジャンパースカートの上）に羽織るＶネックセーター。新制服のイートンジャケット（上着）の着丈は若干長くなっており、このＶネックセーターを上着の下に着用しても、裾部分が上着の下からはみ出ることは基本的になくなる（自分にあったサイズのセーターを選べば……ということ）。

制服リニューアルから丸10年が経ちましたが、2022年秋から、その制服にスラックスとベスト・カーディガンが新たなアイテムとして追加されました。ちなみに、実現したのは生徒たち自身です。



生徒総会後の投票結果（当時の生徒会広報より）

制服着こなしガイドブック完成版

（南山高等学校・中学校女子部教諭）

聖霊の理科室

市原　由美子

聖霊中学高等学校の校舎が移転して３年半がたちました。コロナの影響を乗り越えてようやく新しい校舎での学校生活が少しずつ軌道にのりつつあります。今回、旧校舎の理科室の思い出を通して、理科の授業やそれを支えてきた多くの先生方の思いについても書いてみたいと思います。生徒達の姿やの聖霊の理科を知っていただき、応援していただけたら幸いです。

私が初めて聖霊を訪れたのは昭和57年３月のことです。大学に片足を残しながら非常勤として勤めることとなり、校長室で挨拶を済ませた後、ひとりで理科室を訪れました。そのとき、最初にご挨拶をしたのがN先生です。N先生は、私を教育実習生と間違えられてなぜだか大きな声で叱られたのを覚えています。ただ、今から思うと学生気分の抜けない私を一瞬で見破られたのかもしれません。理科室での最初の出会いは私に緊張と不安な気持ちをもたらしました。私は時間がたつにつれ、少しずつ授業にも慣れていきましたが、理科室にはなかなか近寄りがたかったのを覚えています。

その頃の聖霊では、女子は文系に進むのが当たり前というような考え方がありました。しかし、その中でも理科の先生方が、科学や自然にあまり興味をもたない生徒達に理科を身近に感じることができるように授業を工夫されていること、実験や観察を大切にされていることがわかってきました。自分が中高生のころには、あまり実験をしたことがありませんでした。ですから、教科書や問題集でわかったつもりになっていた多くのことに対して、聖霊生が実際に体験を通して学習していることは、大きな驚きでした。理科室にはいつもＮ先生やＫ先生など、どなたかがいらっしゃって、探しても見つからない器具の場所や、わからないことをいつでもお聞きすることができました。私が何かの実験計画をすると、こうするとうまくいくよなどのアドバイスがもらえました。そうしたことで、実験することを応援してもらえていると感じましたし、生徒に経験させることの大切さを教えてもらったような気がします。余談ですが、このあとになってやっと、カリキュラムが変わって聖霊でも物理を使って理系の大学を受験できるようになりました。

理科室は、普通教室があるＢ棟の南側のＣ棟にあり、

旧校舎の第２理科室

職員室からは遠く離れていました。生物・地学の実験器具をそろえた第１理科室、化学実験のガラス器具などがある第２理科室、そして光学や電気・力学などの実験器具がある第３理科室がありました。また、２つの理科準備室の中には、薬品庫の他に暗室や天秤室、木工室などがありとても充実していました。その準備室の中には、いろいろな不思議なものであふれかえっていました。たとえば、数学科のＯ先生が自作した物理の実験道具や生物のホルマリン標本や化石、岩石標本、二酸化炭素の大きなボンベ、天体望遠鏡などさまざまで、いろいろな先生達が、情熱をもって実験や観察を準備し、生徒達に語りかけた足跡でした。

そのように何か工夫したり、挑戦したりすることが許される理科室で、若いころの私もいろいろなことを試すようになりました。誘われて、孵卵器でニワトリの有精卵を孵化させようと何日か観察した覚えがあります。結局、最後まで孵化させることはできませんでしたが、良い経験になりました。また、Ｓ先生がされたというニワトリの解剖をまねて、肉屋で鶏を買って解剖したこともあります。鶏肉の脂肪で実験室の流しを油だらけにして叱られたことは苦い思い出です。化学実験では、ほんの少しだけ生成することができたサリチル酸メチルのにおいなどを思い出します。自分の記憶に残り、自分の糧になることの多くは、自身が体験し感じたことが土台になると私は思います。聖霊では、どの先生も生徒達に実験や観察を経験させることをとても大事にしています。

生徒達にとって理科室とは、どんなところだったでしょうか。何か実験のこと覚えているのかなと期待して、現在教員をしている教え子に聞いてみました。すると、「理科室かぁ。リーダー達でクリスマスのボランティアのろうそくをつくったとき、床を蝋でつるつるにしてめちゃくちゃ叱られた。」と返事が返ってきました。そういえばそんなこともありました。理科室は、よくリーダーの活動場所や文化祭の控え室になっていました。理科室の裏の駐車場や水道のあるスペースで、応援合戦の練習やクラス演劇の練習をする様子を何度も見たものです。聖霊では、生徒達が誇りをもって、自らいろいろな活動を自ら計画していたのだったと思い出しました。主体的な活動が、理科の授業より思い出深いのは当然かもしれませんね。理科室付近は、そんな活動を後押しする少しだけのびのびした空間だったような気がします。新しい校舎でも、生徒達がのびのびできる空間をみつけて、新しい活動を創造していくことができればいいなと思います。

旧校舎では理科室・準備室合わせて５室ありましたが、新しい校舎では理科室が２つ、準備室が１つに減りました。今では中高６学年の授業の実験が２つの実験室に詰め込まれていて、実験が終わってすぐに片付けなくてはならないという忙しさに陥っています。南山学園の他校と違い実験助手がいない聖霊では、一つの実験の準備をするために、その授業時間の２倍以上の時間が準備と片付けにかかります。理科教員の負担は増えるばかりなのです。しかし、今も理科の先生方が実験や観察を大事にされているのは変わっていません。実験などを通して理科に興味をもち、理系への進路をめざす生徒も増えています。私たちは理系に進む生徒だけではなく、多くの生徒たちの自然科学の教養を高め、今後直面する問題に向き合う力を育てたいという理想をもっています。また、実験には失敗がつきものですが、教員の間で実験の方法やこつなど互いに交流し合う風土は今も続いています。私も、今は先輩の先生ではなくて若い先生方にたくさん教えてもらっています。

これからも、40年前と同じように、多くの先生方の挑戦や努力が詰まった新しい理科室で、さらに聖霊の理科教育が発展することを願っています。

旧校舎の理科室からＢ棟への渡り廊下

（聖霊高等学校・中学校教諭）

南山小の子どもたちのオリジナルソング

～コロナ禍を乗り越えて～

河田　愛子

～せなかに重たいランドセル　とび出せグラウンド
はりきりぶつかり　あいたたた
ごめんね　なかなおり～

これは、2017年度に２年生児童の詩をもとに作曲した『南山小の一日』の歌詞の一部です。

小学校の子どもたちの生活では、大人の私たちとは全く違う感性・視点で、様々な出来事が起こります。毎日新たな発見をし、多くの刺激を受け、毎日の生活は私たちが思う以上にきらめいていることでしょう。子どもたちの心の中はいつもカラフルで、学校生活は日々様々な変化に富んでいます。

私は、子どもたちのその時その時の心情を映し出すものとして、この15年間子どもたちと共に歌を作ってきました。曲を作り始める大きなきっかけとなったエピソードをご紹介します。

私が教員になったのは2008年、小学校が開校した年でした。2008年度ライネルス２の児童が火曜日の全校朝会後、第二音楽室に来ました。当時はまだ、朝の音読のがんばりタイムがあり、子どもたちが懸命に谷川俊太郎氏の『いち』という詩を音読して聞かせてくれました。子どもたちの、エネルギッシュで、一人一人の個性が合わさったような音読は､時間にして１分強ほどでしたが、私の心を大きく揺さぶりました。子どもたちに、感想を求められた私は、その時に感じた自分の心の揺れを、言葉ではなく目の前にあったピアノで演奏しました。詩と音楽を通じて、子どもたちと心を通わせることのできたあの時間は、今思い出してもなんと豊かで美しい時間だったのだろうと、15年も前の出来事とは思えないほど鮮明に蘇ります。

その出来事がきっかけで、「詩に曲をつけてみよう！」と思い立ち、『いち』の詩に曲をつけました。子どもたちから得たインスピレーションはすさまじく、ある日の夕方、第二音楽室にパソコンを持ち込んで、一日でメロディーも伴奏も完成したのを覚えています。

そこから、15年間、様々なシーンに合わせて、子どもたちのための曲を作ってきました。子どもたちや学年の先生方が作ってくださった詩に曲をつけたもの、国語や書写等の教科の学習に活用するために作ったもの、合唱曲やアンサンブル曲。私の思いや音楽を具現化してくれるのは、いつも南山小学校の子どもたちの生き生きとした歌声でした。

そんな中、2018年度、南山大学附属小学校は10周年を迎え、周年事業の一つとして、本校のオリジナルソングの楽譜集と CD が制作されました。

それまでに制作した50曲ほどの中から、開校からそれまでの全学年の思い出の１曲をセレクトし、13曲を曲集に載せました。

特に思い出深い曲として、『ここから、これから､』があります。10周年の記念歌として、全校児童から言葉を募集し､担当の保護者の皆様と共に歌詞を作りました。この先に向かう前向きさ、壮大さを意識した楽曲になるよう、リズムや伴奏を工夫しました。

そして、制作委員のあるお母様がおっしゃった「この１冊を通してこの南山小の歴史というドラマが見えるように」という言葉を意識し､楽譜集も完成を迎えました。

楽譜集ができたことで、さらに多く子どもたちと歌っていこうと思っていた矢先の2019年度冬、コロナ禍となり、子どもたちの歌声は、一瞬にして学校からなくな

りました。学校は休校、翌４月からはオンライン授業が始まり、全く想像していない形の学校生活が始まりました。少しずつ登校日が増え、対面授業が始まってからも、“歌”は歌えないままの状況が続きました。【心の中で】【ハミングで】【マスクをつけて、小さな声で】と常に注意書きがある状態でした。小さな声で歌えるようになってからも、長い期間人前で口元を見せることもなく、声を出して歌うこともなかった子どもたちは、歌うことへの抵抗や自分を表現することへの戸惑いが前面に出ていました。活動ができるようになり、喜ぶ気持ちがある一方で、コロナ禍により変化してしまった子どもたちの実情を見せつけられるようで、大変辛い時期でした。

音楽がコロナに奪われてしまったことを嘆く期間が暫く続きましたが、2021年12月のクリスマス会で嬉しい出来事がありました。コロナ禍以前のように体育館に集まることはできず、各教室でテレビに映し出された映像を見ながらのクリスマス会ではありましたが、画面の“しずけき”の歌詞を見ながら各クラスで子どもたちの歌声が響きました。全校の児童が、場所は違っても同時に歌を歌うということが大きな前進でした。学校に歌が戻ってきたのだと、嬉しさから校内中を歩き回り子どもたちの歌声に浸りました。

2022年11月には名古屋フィルハーモニー交響楽団の方による芸術鑑賞会が行われました。その会で、コロナ以降初めて体育館で集まって歌うことができました。６学年で歌うことはできませんでしたが、３学年の声が響きました。その時に歌う曲として選曲したのは、2011年３年生の児童らと作った『ねえ　イエスさま』でした。穏やかなメロディー、神様に感謝を伝える思いを込めた曲です。くしくも、2022年は、当時３年生だった子どもたちが20歳を迎える年でもあり、さらに感慨深い出来事ともなりました。

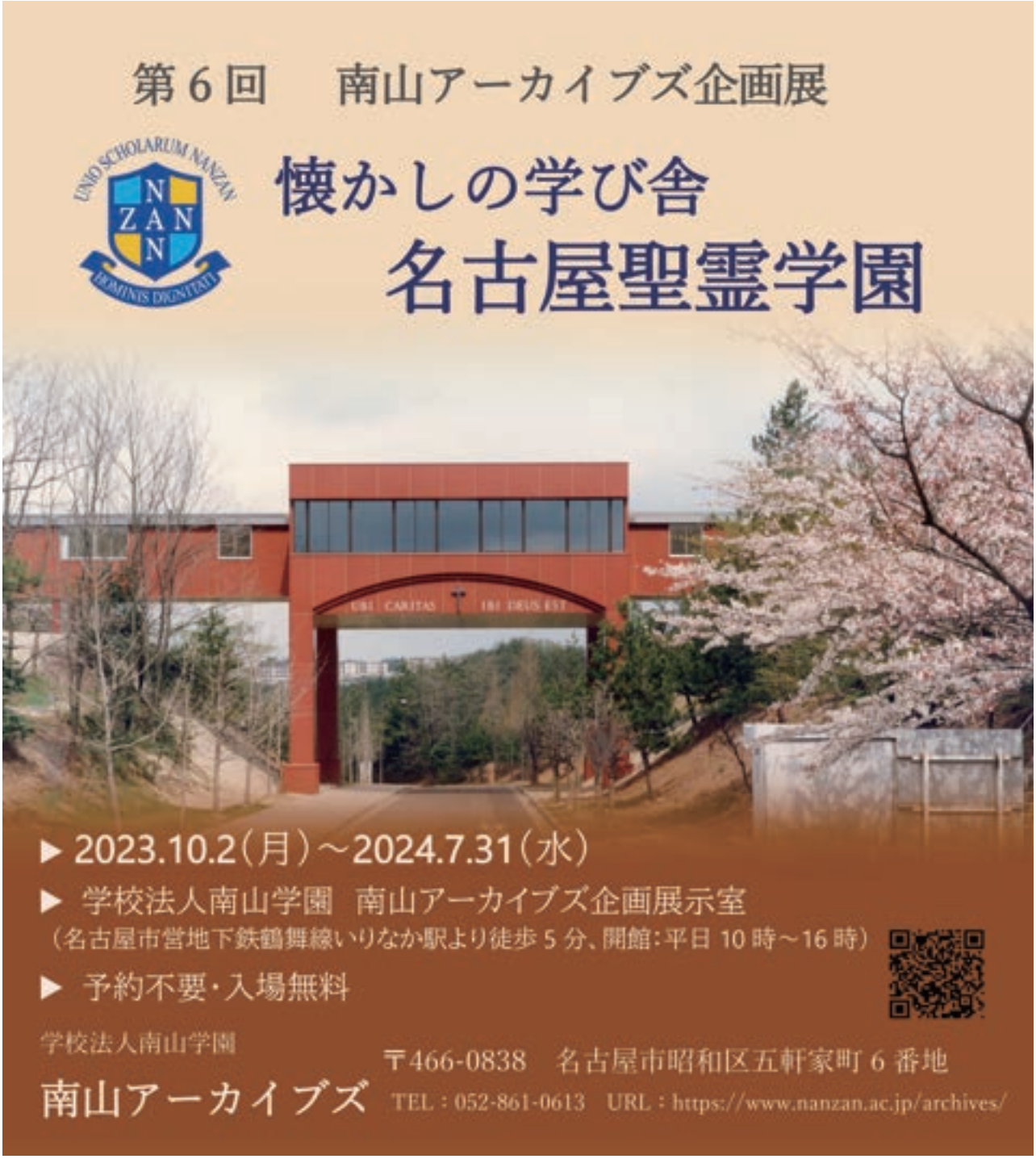
今年度、私は３年生の担任をしています。６月に宿泊学習があり、学年目標でもある『SUN』をテーマにした曲を作りました。学年の先生方と語り合いながら、子どもたちの歌詞のアイディアをまとめたものです。

この曲は宿泊学習２日目、多治見修道院でのミサの後に聖堂内で歌いました。聖堂の高い天井に、３年生全員の歌声が響き渡りました。

私は聖堂の前方にセットした電子オルガンで伴奏をしました。歌っている子どもたちの表情には、彼らの心情そのものが映し出されたようで、マスクをせず自分の表現したいように表現しようとする、本来の子どもの姿を取り戻したような気がしました。伴奏を弾いているので、涙をぬぐうこともできませんでしたが、ある意味で私も、自分の心のままに子どもたちの歌声を味わい、子どもたちの思いのつまった曲を存分に味わうことができたようにも思います。子どもたちの歌声は、宿泊学習の中で印象的な出来事になっただけではなく、コロナ禍を抜け始めたこの時期で、私に次のステップへの希望を与えてくれる出来事となりました。

今年度７月に行われた静修では、全校児童が４年ぶりに南山教会に集まることができ、エネルギーに満ちた歌声が聖堂内に響き渡りました。少しずつ、コロナ禍から通常の生活に戻り、南山小にも子どもたちの歌声が戻りつつあります。神様は子どもたちに歌声という素晴らしい楽器を与えてくださいました。子どもたちの歌声を大切にしながら、南山小が一歩ずつ前に進んでいけることを願っています。

（南山大学附属小学校教諭）



南山アーカイブズニュース　第16号
Nanzan Archives News

発　行　日　　2023年11月1日
編集・発行　　南山アーカイブズ
　　名古屋市昭和区五軒家町６
印　　刷　　株式会社あるむ
　　名古屋市中区千代田3-1-12